

萬葉集小考

三三三三の歌をもとに、感覚の世界を探る

神谷正彦*

A Study of MANYOUSHYU

an examination of the sensibilities
of the poet based on the 3232nd verse

Masahiko Kamiya

る。そのほか古代の文献には、このほか『見ること』を強調したものが多
い^(注)。

私が「見る」世界と「聞く」世界を考えてみたいと思ったのは右の論を知
てからである。けだし、見る・聞くいずれも人間の生得の能力である。理性や
知性の発展も、その前段階にこれらの基本的感覚があったと思われる。いわば
これらの働きは、ひとり人間にとどまらず、動物全体の最も素朴な「知」の世
界を形成していると言えよう。

さて、三大集を使って、「見る・聞く」の用例数を比べてみる。

萬葉	見る・見ゆ	一〇九四例
	聞く・聞こゆ	一九三例
古今	見る・見ゆ	二二二例
	聞く・聞こゆ	三七例
新古今	見る・見ゆ	三二七例
	聞く・聞こゆ	七〇例

人間の五感といえば、それは言うまでもなく視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚
であるが、詩人の内部で高められる詩的感動と結びつきが深い、という点で考
えてみると、やはり視覚と聴覚が主となってくる。詩人たちの感覚的世界を支
えるのは眼であり耳であると思うのである。では、この二つの感覚が、歌にお
いてどのような現われ方をしているのか、またこれらの間に何らかの関係があ
るのではないか、について考えてみたい。その材料は萬葉集・古今和歌集・新
古今和歌集(以下略称を用いる)である。簡単に言えば「見る」「聞く」の表
わす世界についての一考、と言えようか。

まず、中西進氏の言うに、「私は古代人のまず第一に持った知覚は、目を通
してであったと考える。われわれの知覚は(中略)対応させてみると、

- メ(目) ミル(見)
- ハナ(鼻) カゲ(嗅)
- ミミ(耳) キク(聞)

といったように、ことばのついで上下が一致するのは、目と見るだけであ

(ただし、複合語は含まない)この統計から言えることは、古今一一〇〇首、
新古今一九七九、萬葉四五一六という総歌数の比率からみて、萬葉における見
る・見ゆの用例の豊富さと一方の聞く・聞こゆの意外な少なさである。(見る・
見ゆが一つの歌で重複する場合があるので、右の用例数=歌数とは断定できな
い)萬葉集には様々の階層の人々の歌が載せられているので、当時の人間を語
るのに都合がよく「萬葉人」なる語でそれを代表できよう。

それはともかく、萬葉人の感覚のうち、歌に視覚が多く現われるのには、何
を語るにもまず「見る」ことが根本の要件であって、美意識を支えるのは「見
て美しい」ことであつたのだらう。萬葉人の歌は二三〇年間にわたっている
が、一〇〇年以上後に編まれた古今集との比較は種々の点でよく取り上げられ
る。

「見る」ことについて、拙い比較をしてみると、古今集の歌人たちにとつ
て、「見る」ことは歌を生み出す美の認識の過程で歌人の内部にとりこまれ、

* 総合教育科

表面に出てくることは萬葉人に比べると少なくなっているとは言えまいか、つまり感覚(見る) 感動 観念的処理 歌、というパターンの登場が「見る」という語の表出の機会を少なくしていると考えられる。このパターンは萬葉人のそれに比べ少しく屈折したものと受け取れる。

「見る」と「聞く」との差異を考えるうえで、私は萬葉集の一つの言いまわしに興味を持った。それは「雖見不飽」(巻十三の初出は三三三)であつて、集全体では五二例を数えている。古今集・新古今集ではこの表現はそれぞれ二例しかないが、これは「雖」という漢語表現が和語となじまなかつたからであらう。

さて、この表現を裏返してみると、「見る」ことが「飽く」ことの必要条件となつているようで、これを用例数から言つと「飽」は集全体で九三例、うち「不飽」は七六例(用字のちがいは考えない)、またそのうち「見る」と結びつくもの五三例、「雖見不飽」と同意と思われる例全体)となり、「見る」と「飽く」との密接な関連を裏付けている。

一方、「不飽」が「聞く」と結びつく例は萬葉集中五例のみである。「見る」と「飽く」と「飽く」は①満足する意、②現在の「飽きる」と同じ意があり、ここは②の、満足感が度を越して感情にむしるマイナスをきたした状態と思われ、よつて「不飽」となればそのマイナス部分が切り捨てられ、心に快の状態が保たれるのである。もし詩的感動にも段階があるならば、「不飽」はその最も終局の高まりを意味するのではあるまいか。また「見る」は人間の感覚の世界を支えており、もちろん「見る」ことに段階は考えられないとしても、歌が生まれるのに大きく寄与しているとみたい。「雖見不飽」は、単に美を認識し感動するにとどまらず、それが持続性を持ち歌う者の強い賛美を表わしている表現であると考えたいのである。「雖見不飽」とつたわれるものの用例をたどると、野・浜・浦・磯・川・山・花・白波・白雲といった自然のほかに君・吾妹子といった人間をも含み、またしても私は「見る」の用例の豊かさに驚く。

一方「雖見不飽」を見てみると、先に集中五例と書いたが、その対象となるのは、ほととぎす(三例)・ひぐらし・こほろぎである。これらの動物はぜんたい、姿より声・音をめめることに重きが置かれる。これらの対象の中に美を発見するには「見る」ことは必要なく、それに代わつて「聞く」ことが必

要条件となるのである。これらの美は「見る」ことでは到底感知し得ない。「雖見不飽」はこういつた独自の世界を持つている。

私の言いたいことは、「見る」が「聞く」よりもその用例数においてまさる点から、「聞く」よりすぐれた感覚であるといふことではない。「見る」も「聞く」もそれぞれ独自の世界を持つが、「見る」ことでなければ表わせない美が「聞く」ことのそれよりもはるかに豊富であるし、また、「見る」と「聞く」との共同によつてはじめて得られる美も「見る」ことの印象が強ければ「聞く」は「見る」に代表され包含されて歌に現われない、といふことである。

佐竹昭広氏は「視覚がわれわれの感覚器官のうちで最も優位に立っている」と述べ、続いて『音を見る』『匂いを見る』このような体験を心理学では共感覚と名づける。すなわち共感覚とはある感性領域に刺激が与えられた場合、他の様相の感覚が随伴する現象をいう。(中略)共感覚における一次感覚と随伴する二次感覚との組み合わせには(中略)いろいろな種類があるとはいへ(中略)一次感覚が視覚で、二次感覚に視覚以外の感覚を生ずる事例がほとんどないのに対して、二次感覚には視覚の生ずる事例が比較的多いといふことである。そしてもう一点、「われわれは、終止形『見ゆ』で文を結ぶという、古代和歌における特徴的な用法を手がかりに、『見ゆ』といふことばの背後にあつた古代の意味を探ることができる。(中略)作者の意識の底には、一つの情景を詠ずるにあつても、あえて、『見ゆ』と述べざるを得ない強い欲求があつた。動作の進行を『見ゆ』で表現しなければおさまらない潜在的ななにかがあつた。『強い欲求』『潜在的ななにか』が、存在を見えるすがたにおいて描写的に把握しようとする古代の心性であることは、もはや繰りかえすまでもない。」とまとめているが、感覚相互の優劣を論ずるのは「雖見不飽」の独自の世界で述べたように私は問題があると考ええる。「見る」「聞く」の相違はあくまでも、その感覚の対象が「見る」世界に豊富であることにとどまるべきだと信じているのである。とは言え、「見る」ことの占める領域は非常に広い。色彩感覚も「見る」の世界とは深くかわつている。「雖見不飽」の対象が例えば巻十三では「落白浪」(三三三)であり、集全体で「白」との関係がはつきりするものは十五例を数える。萬葉人たちの強い賛美が「白い」ものに対してこれだけなされたという事実は、「白」がかなりの美的価値を持つていたことを意味し、また「白」を判別するための「見る」ことがそこに大きな要件であ

ったことを明らかにするであろう。

ひとたび、時間と空間を隔てたギリシヤ神話に目を向けると、池に映った自分の姿を自分とは知らずに見とれ、遂に水仙になったナルシスの話、天使の水浴を見たため目がつぶれた者の話、その鋭い眼差に見られた者を石にしてしまうゴルゴーンの話など、古代の文献をあたればあたるほど「見る」の世界の広さを識るばかりである。今さらに冒頭に引用した中西氏のことばがよみがえってくる思いがする。

注

- 1 講談社現代新書「神々と人間」25頁、26頁
- 2 『古今』には、「聞けどもあかず」の用例なし。『新古今』には一例あるが、それは『萬葉』巻十・一九三五の重出である。
- 3 小学館「日本古典文学全集」第二巻の補論、「見ゆの世界 万葉集を支えるもの」による。

参考文献

- 国文学 解釈と鑑賞 第23巻第1号「万葉の詩と自然」 昭63
 平安朝文章史 渡辺実 筑摩書房 平12
 本文解釈学 萩谷朴 河出書房新社 平6

